えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

えど友

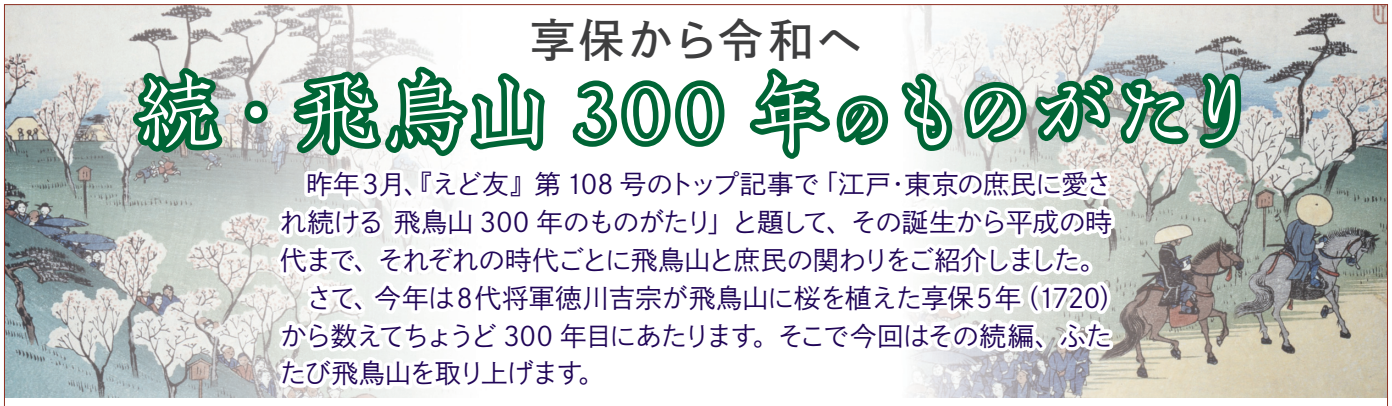
EDO-TOMO

第114号
令和2年
(2020)
3 − 4

江戸東京博物館友の会会報

目次

享保から令和へ　続・飛鳥山 300 年のものがたり……1〜2
2020 年度［古文書講座］の概要とご案内……3
えど友広小路
　サークルだより／翻刻だより／友の会めも ……4
友の会セミナー「芭蕉と江戸」……5
友の会セミナー「公家女性の装束と着装について」……6
見学会「春日局と大奥コース」……7
見学会「日本橋七福神めぐり」……8
えど東京一景(21) ―田園調布駅旧駅舎―……9
江戸博クリップ「美術館と博物館」……9
江戸名所図会を歩く…㊽［大堂から十羅刹女の宮］……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11〜12



享保から令和へ
続・飛鳥山 300 年のものがたり

昨年3月、『えど友』第 108 号のトップ記事で「江戸・東京の庶民に愛され続ける 飛鳥山 300 年のものがたり」と題して、その誕生から平成の時代まで、それぞれの時代ごとに飛鳥山と庶民の関わりをご紹介しました。

さて、今年は8代将軍徳川吉宗が飛鳥山に桜を植えた享保5年 (1720) から数えてちょうど 300 年目にあたります。そこで今回はその続編、ふたたび飛鳥山を取り上げます。

浮世絵の中の飛鳥山

飛鳥山は江戸時代を通じて、北斎、広重をはじめ多くの浮世絵師たちによって描かれてきました。全山咲き誇る桜花、青い松と緑の芝、そこでは武士や庶民などあらゆる階層の人々が集い楽しんでいます。はるか彼方には富士山や筑波山が聳え、絵師たちにとってこれほど絵心を動かす景色はありません。

下の三枚組の錦絵は、満開の桜を背景にそれぞれ華やかな着物をまとった女性が子どもと一緒に描かれています。右図の子どもは王子稲荷神社の狐の霊力と、邪気を払う「暫(しばらく)」を合わせたカラクリ玩具「暫狐」を、また中図の子は花見の仮装グッズ、赤い天狗の目かつら(目だけ覆うお面)を手にしています。左図の紙烏帽子(えぼし)を被(かぶ)った子は桜の小枝を担いでいます。「折りとるは憎さも憎し心根の かはゆくもある花の盗人」の狂歌そのものです。

もう1枚の浮世絵(次頁)は花見の宴を楽しむ女性だけのグループ。緋毛氈(もうせん)の上で、晴れ着の女たちが三味線に合わせて手踊りを楽しんでいます。折詰弁当、お重、煙草盆、お燗の道具や大きな角樽(つのだる)まで持ち込み準備万端です。どちらの絵も飛鳥山の平和でのどかな春の情景です。

▲「飛鳥山花見」溪斎英泉

飛鳥山の花見と茶番狂言

江戸時代後期、茶番とよばれる道化芝居が盛んに行われました。天明のころより酒席を中心に徐々に広まり、座敷から街頭へ、さらに行楽地の

▲「江戸名所図会 飛鳥山」（部分）初代歌川広重

群集の中へとその舞台を広げていきました。花見の場で実際に演じられた茶番の記録が残されています。天保11年(1840)の飛鳥山。ひときわ目立つ美しい町家の年増盛りの２人と連れの男２人。酒宴の最中に女の１人が産気付き、群集が大騒ぎ。通りがかりの医者に助けを求めると、医者が開いた薬箱の中身はなんと刺し身や重詰め、いろいろな肴。程なく女がうなりながら産み落としたのはなんと３升ほどもある酒樽。見物の中から三味線を持った者も飛び入り、もう１人の女が弦を取り出し、医者も唄い出すと産婦まで踊り始めます。見物客は皆かつがれてしまったのですが、今年の花見随一の趣向だと評判になったそうです。飛鳥山の花見は、酔った上での喧嘩や狼藉も多くあったようですが、庶民にとっては桜の下で酒肴を楽しみ、歌って踊れる最高の場所だったのです。

「象山先生櫻賦」の碑

「飛鳥山の碑」は難解な漢文で「読めない碑」として有名ですが、飛鳥山にはその他にいくつもの石碑があります。

佐久間象山は、門弟吉田松陰の密出国の企てに連座して、故郷松代に蟄居となりますが、その時作ったのが櫻賦（さくらのふ）です。「桜が陽春のなかで光り輝いている、桜の花は見る人がいなくても芳香を漂わせる」これは勤王の志を桜に託した詩といわれています。明治に入って、門弟の勝海舟らによって建立されたのが「象山先生櫻賦」の碑です。桜の名所飛鳥山の地にふさわしい碑だと思います。

ちなみに象山は身長180cm近く、当時としてはかなり大柄、恰幅もよく、目は爛々として、日本人には珍しく色が抜けるように白かったそうです。浦賀に来航したペリー提督は日本側に対して終始、傲慢不遜な態度だったのですが、象山を一目見て、その威厳に思わずお辞儀をしてしまったといいます。さすがわれらが象山先生です。

飛鳥山の桜の危機

下の明治時代の浮世絵、やはりお花見ですが、飛鳥山の眼下に工場の煙突からもうもうと煙が出ています。今の私たちには美しい錦絵とはとても思えませんが、当時の人々にとっては煙こそが国力の発展の象徴で、新しい時代を迎えるにふさわしい景色だったのです。

▲「古今東京名所 飛鳥山公園地 王子製紙會社」三代歌川広重

大正時代に作られた地元「王子町歌」には驚かされます。１番は、♪飛鳥の山の山桜 花いく度びか咲き散りて…と普通ですが、２番は、♪林と立てる煙突の 吐くや不断の黒煙り 空飛ぶ鳥も羽すすけ 掛け干す衣（きぬ）も黒めども 国の力もはた富も これによりてぞいや増さん ああわが王子 わが王子♪、なんともすさまじい歌詞です。

毎年、飛鳥山の桜を見続けてきた人の明治44年(1911)の日記にも「桜花年々、ばい煙の為にすたれて見る影もなくなった、このままではこの名所も失われてしまう」という嘆きの言葉が綴られています。もっとも環境破壊や大気汚染問題は、今も地球規模で解決の糸口すら見い出せていませんが…。

渋沢栄一と飛鳥山

飛鳥山公園の敷地にかつて渋沢栄一が住んでいました。明治12年から別荘として使用し、その後、明治34年から亡くなる昭和６年(1931)までの自宅でした。この地に邸宅を構えたのは、栄一が設立した王子抄紙会社(現王子製紙)の近くで、工場の操業後も同社を見守り続けたいとの思いがあったのでしょう。広々とした庭園を備えた別荘には初めての賓客として、明治12年にアメリカ前大統領のグラント将軍を迎えています。

渋沢栄一が創立や運営にかかわった企業は実に500、医療や福祉、学校などの団体は600を数えます。まさに近代日本経済の基盤を作ることに尽力した彼ですが、その活動拠点がここ飛鳥山であったといえます。

昨年、NHK「歴史秘話ヒストリア」で「渋沢栄一 時代を開く 新一万円札の男の実像」が放映されました。再来年から新１万円札の肖像となる渋沢栄一、昭和38年発行の千円札の肖像にも栄一が最終選考まで残りましたが、偽造されにくい髭をたくわえた伊藤博文になったというエピソードなども紹介されていました。また、来年のNHK大河ドラマの主人公が渋沢栄一に決定、イケメン俳優の吉沢亮さんが演じます。女性ファンで視聴率アップが期待できそうです。

いざ花の飛鳥山へ

飛鳥山の桜300年の節目。そして今年は令和に改まって初めてのお花見となります。

「飛鳥山３つの博物館」、そのうち、北区飛鳥山博物館では、３月17日より春期企画展「飛鳥山三百年展―楽しい！だから続く、吉宗がつくった江戸のワンダーランド―」が始まります(入場無料)。また、渋沢史料館と紙の博物館は昨年９月１日より休館していましたが、渋沢史料館は３月28日、紙の博物館は３月17日にそれぞれリニューアルオープンします。お花見かたがた、各館へ足を運ばれてはいかがでしょうか。

参考資料：『名所の誕生』北区飛鳥山博物館、『北区こぼれ話２』北区立中央図書館編、『王子・滝野川と渋沢栄一』渋沢史料館、小野佐和子『江戸の花見』、童門冬二『幕末の明星　佐久間象山』
浮世絵：提供・北区飛鳥山博物館

【取材】文：広報部会・岡本　脩

2020年度［古文書講座］の概要とご案内

**ご好評をいただいている古文書講座の2020年度の内容を
３人の講師にご紹介いただきました。**

◆**入門編**（担当：田中潤講師）
《学習院大学非常勤講師／現在力を入れている研究テーマ：日本文化史・有職故実（服飾・染織など）》

○受講対象者・レベル：活字による文書から、電子情報による文書の時代へと急速に変化が進む現代において、手書きの文字の持つ大切さが一層際立つように感じられます。一つの文字を、どのように崩して書き、文面全体の中ではどのように文字同士の調和を取るか。活字の世界では縁遠くなった感覚を、崩し字で書かれた古文書は私たちに思い出させてくれます。
この講座では、初めて崩し字（古文書）に触れられる方、すでに読める方であっても、基礎から確認をなさりたい方なども歓迎し、全くの初心者の方に合わせた進度で講座を進行します。その際、古文書を読んでいく上での三つのポイント、「①文字から読む②文脈から読む③周辺の知識から読む」に焦点を当てながら、古文書に書かれた字の『くずし字辞典』での調べ方、基本的な文字の読み方など、古文書を読んでいくために最低限必要となる基礎的な知識について、テキストに沿いながらご紹介していきます。そして、ご自身が読んでみたいと思う古文書や、博物館・美術館に展示された古文書などに、より親しみをもって見ていただく上でポイントとなる、書かれた文字だけにとどまらない古文書の背景にある様々な情報についても紹介していきます。

○講座の進め方：崩し字が読めても、内容が正しく理解できるように読めないと、古文書が読めるようになったとはいえません。この講座ではまず活字に直したテキストで、古文書の読みを確認し、その上でテキストとなる崩し字の解説を行います。テキストは基本的に初回に１期分（計３回分）を一括して配布し、受講者の方々が受講以前に目を通して頂いた上でゆっくりと進めていきたいと思います。

○使用史料：江戸時代の人々が初等教育用の教科書として使った、往来物と呼ばれる往復書簡の形式をとったものを中心とし、今年度は関東地方の地誌に関する往来物を取り上げ、合せて適宜関連する史料や仮名で書かれた和歌なども取り上げます。

◆**初級編**（担当：安藤奈々講師）
《学習院大学大学院史学専攻／現在力を入れているテーマ：近世対外関係、琉球。特に身分制度などの社会構造、琉球使節の構成》

○受講対象者・レベル：本講座では基本的な崩し字が読める方を対象にしていますが、入門と中級の架け橋となるよう心掛けており、文字の解説にも力を入れています。

○講座の進め方：初回に１期分のテキスト（３回分）を配布し、まず各回で講義前半は、扱う史料の内容・背景知識を解説します。後半に、史料読解に入っていきます。よく出てくる文字の崩れ方、似ている文字や、また難読文字の解説などを重点的に行います。レジュメは読み下し、現代語訳、釈文もつけて復習できるように心掛けて作っています。２回目以降は予習をした上で受講をしていただきたいと思います。

○使用史料：基本的には『旧幕引継書』などに含まれる江戸に関する史料をテキストとしますが、その周辺地域、または同じ題材から見る都市比較など、幅広く取り扱っていきたいと考えています。

◆**中級編**（担当：吉成香澄講師）
《徳川林政史研究所非常勤研究員／現在力を入れて取り組んでいる課題：将軍姫君の婚姻と幕藩関係・江戸城大奥》

○受講対象者・レベル：本講座では、基本的な崩し字が読める方を対象にしています。

○講座の進め方：初回に全回分のテキストを配布し、各回で参考となるレジュメを配布します。本講座では、古文書を解読するにあたり押さえておきたい字を解説の対象とし、基礎的なものについては必要最低限にとどめます。史料に記された内容の解釈や解説、関連する研究成果の紹介などを重点的に取り組み、より史料の理解を深めることを目指します。扱うテキストは、江戸幕府・大奥・武家関係のものが主になります。講座を通じて江戸幕府についての知識を広め、史料への理解を深めていきたいと思います。

○使用史料：「多聞櫓文書」（国立公文書館所蔵）などの幕府史料、大名家の史料など。

○史料の内容：幕府の諸役所で作成された記録類。武家関係

新年度第１期５月開講のお知らせと留意事項

古文書講座の新年度第１期は５月から下記日程で開講します。申込は講座ごとで、**申込の受付は３月末まで**です。多数の皆さんのご参加をお待ちしています。

◆**入門編**
・講師：田中潤さん
・開催日：5/13（水）、6/3（水）、7/1（水）

◆**初級編**
・講師：安藤奈々さん
・開催日：5/20（水）、6/17（水）、7/15（水）

◆**中級編**
・講師：吉成香澄さん
・開催日：5/23（土）、6/13（土）、7/18（土）

- 時間：午前は10:30〜12:30
  午後は14:00〜16:00
  （午前か午後かの希望を忘れずに明記のこと）
- 定員：各講座とも90人（会員のみ）
- 参加費：各講座とも全3回2,000円（初回一括払い）
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室

【企画担当責任者】
川上由美子（事業部会）

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

12月17日(火)高橋純夫さんの月番で、人間国宝柳家小三治の特集としてドキュメンタリー映画「小三治」、DVD「睨み返し」を鑑賞。参加者16人。

1月21日(火)月番田中文彬さんが「志ん生　曼荼羅」のタイトルで昭和を代表する名人古今亭志ん生関連のテープやDVDを披露。いろいろな角度から志ん生を偲んだ。参加者19人。

◆藩史研究会

12月13日(金)杉山正昭さんの担当。田中藩は静岡県藤枝市田中にあった藩。関ヶ原の戦い後、酒井忠利が1万石で入り田中藩を立藩。短期間に11家が移封を繰り返した。1730年本多正矩が4万石で入封、本多家は明治元年まで7代続いた。参加者8人。

1月10日(金)みんなで調べる藩史の第6回。江戸崎藩は茨城県霞ヶ浦の南部に位置する江戸初期の藩で、1603年青山忠俊が立藩。1610年移封し一時廃藩。1619年古渡(ふつと)藩(現・江戸崎町に隣接)1万石領主丹羽長重が江戸崎領1万石を加増、江戸崎藩2万石として再度立藩。1622年に移封、再び廃藩となった。参加者12人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

12月10日(火)米屋久右衛門の「日記」明治11年2月21日～3月26日(12、13年欠)。14年1月1日～17日。参加者7人。

12月24日(火)「日記」明治14年1月18日～2月8日。この頃から生命保険が始まったようで、田中家も躋寿(せいじゅ)社という生命保険会社に出資していたようだ。仕組みはわからないが、社員某が死亡したので、規約に従い準備金から2円3銭(一律で誰でも同じ額)送るように、という葉書が社からしばしばくる。当時、白米が1升12銭くらいだから、2円といえば白米にして1斗6、7升くらいか。参加者7人。

1月14日(火)「日記」明治14年2月9日～3月19日。参加者5人。

1月28日(火)「日記」明治14年3月20日～4月23日。参加者6人。

◆『江戸名所図会』輪読会

12月12日(木)中川博允さんの担当。今回は東武伊勢崎線竹ノ塚駅、梅島駅辺りと隅田川にかかる白鬚橋近辺となる。白旗塚は白旗塚古墳だけが残っている。万徳山明王院は慶長年間、現在地に移転。正一位鷲大明神社は「酉の市」発祥の神社。隅田川白鬚橋の辺りには石浜という地名が残っている。参加者22人。

1月16日(木)清水昌紘さんの担当。橋場の地名は橋場1、2丁目だけになってしまった。朝日神明宮の創建は神亀元年(724)。明治の末頃、石浜神社となる。大正15年真先稲荷明神社は真先稲荷神社として石浜神社に合併移転した。思川は現在明治通りの下に暗渠となっている。参加者19人。

◆日本の大道芸伝承会

12月11日(水)各自の技量を上げるための練習や新旧取り混ぜた練習にも力を入れた。参加者3人。

1月15日(水)それぞれ得意演目を持つべく個別練習。参加者3人。

◆江戸を語る会

12月21日(土)「落語を聞いて江戸を知る」の演題で大竹聿子さんが発表した。落語・寄席の成り立ちや逸話を伺い、立川談志の落語の DVD「ちはやぶる」「芝浜」を鑑賞した。参加者11人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

12月19日(木)本郷三丁目駅に集合。文明年間に太田道灌が江戸城築城の折、菅原道真の神霊を勧請した桜木神社に行き参拝、見学。六本木一丁目駅で下車。太田道灌江戸城築城につき寛正6年(1465)に溜池に遷座、のちに久國作の刀が寄進された久國神社を参拝、見学。歩いて文明10年(1478)太田道灌が江戸城築城にあたり川越の現喜多院から川越日枝神社を勧請したのに始まる日枝神社を参拝。江戸川橋駅で下車、常陸国司平貞盛による創建後、太田道灌により再興され小日向の鎮守として栄えた小日向神社に参拝。さらに、小日向神社の別当寺として創建され、太田道灌が再興したという日輪寺に行き参拝。参加者29人。

12月22日(日)1回目と同じコースを巡った。参加者22人。

1月休会。

館蔵古文書翻刻だより

◆B班『文久三御用日記 上洛記』

昨年10月から上洛記を読み始めた。作者は御中間頭で、14代将軍家茂の文久3年(1863)2月上洛に関する、主に老中からの通達控、願書・伺書の写、諸記録で構成されている。

通達によると、前年6月に上洛が決定され、当初家茂は東海道を行く予定であり、宿駅の疲弊や物価高騰の折から、宿泊所は改めて修理をせず、橋等も捨てておけない場所があれば手軽に取り繕うよう指示している。また、同行・先発する者達も人数を絞り、質素倹約を心がけるよう通達している。12月に京都からも同様の御沙汰があったせいか、28日に軍艦で上洛する事を同乗する御供の内訳と一緒に発している。その後上洛ルート、御法令(喧嘩口論、博打、押売り・押買いの禁止等9箇条)等の通達が出る。2月6日に出帆を21日とする通達が出るが、10日には陸路で13日御発駕と変更する。この突然の変更の背景には、前年8月に起きた生麦事件の賠償金を、英国が幕府に10万ポンド要求し、圧力を加えるために極東艦隊を4日に横浜へ入港させたことがあったといわれている。

友の会めも(開催日と人数)

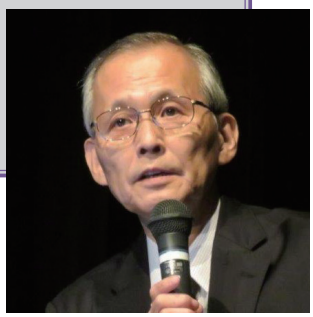
令和元年12月～2年1月

◆役員会12月10日(火)16人。1月14日(火)14人。◆事業部会12月3日(火)21人。1月7日(火)19人。◆広報部会12月17日(火)10人。1月21日(火)12人。◆総務部会12月24日(火)13人。1月28日(火)10人。◆古文書講座 入門編：1月8日(水)午前83人・午後92人。初級編：1月15日(水)午前77人・午後75人。中級編：1月18日(土)午前42人・午後37人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト 12月5日(木)A班7人。B班7人。12月19日(木)A班7人。B班7人。1月16日(木)A班7人。B班5人。

第185回 江戸東京博物館友の会セミナー（令和元年12月21日）

芭蕉と江戸

講師　横浜　文孝さん（法政大学非常勤講師）



芭蕉の句碑

芭蕉が実際に旅した所は北限が秋田県で西は兵庫県ですが、句碑は北海道から南は沖縄を除いて九州まで46都道府県にあり、その数は全国で3000を超えています。なぜ行っていない所にもあるのでしょうか。私が生まれた青森の野辺地に「花盛り 山は日ごろの あさぼらけ」の句碑があり、文政12年(1829)に建てられています。この句は『笈の小文』の旅中に桜の名所、吉野で詠まれており、一方、野辺地は4月末から5月にかけて桜が咲き、江戸時代からすでに桜の名所として芭蕉の句と結びついていたのです。芭蕉の句碑建立には三つの要素があります。一つ目は芭蕉の句と詠まれた土地が一致しているもの。二つ目は芭蕉の句にゆかりの土地ではないが、各地の名所、名勝地と結びついているもの。三つ目は建碑者の句の好みです。その土地と句碑の関係は何なのかを考えると、その建っている意味が分かってくるかと思います。芭蕉が生涯詠んだ句は約980句ですが、「古池や～」の句碑は全国で100基を超えています。

新たな農民説

芭蕉は寛永21(正保元)年(1644)に生まれ、元禄7年(1694)10月12日、51歳で亡くなり、この日を時雨忌と呼んでいます。深川移居の37歳以前は未解明な事柄も多く、江戸に出てきたのが寛文12年(1672)29歳の時とも、延宝3年(1675)32歳の時ともいわれます。家も下級の武士とのことでしたが、伊賀上野城下の地図を見ると家が農人町にあるので、今では農民であろうといわれています。

多くの移居説

延宝3年、西山宗因が江戸に来たときから俳号を桃青(とうせい)と名乗ります。並行して芭蕉という号は39歳の天和2年(1682)からです。延宝7年、「発句也松尾桃青宿の春」と自分の名前を詠みこんでいます。そして翌年、深川へ移ります。さまざまな移居説があり、「談林俳諧の否定」説、「宗匠生活の否定」説、「経済的破綻」説、「純粋に文芸的なもの」説、「寿貞が甥の桃印と駆け落ちしたため」説、「火災による被災」説などです。私が平成9年に『江東区史』編纂で深川周辺の災害関係の史料を読んだとき、延宝8年10月の「新小田原町の火災」の記事を見つけました。その町と芭蕉のいた小田原町は約900mくらいの距離で、火事で焼け出されるとかの影響で深川に移居したという推論をここで立てました。

江戸の火災

江戸の人口は、享保期で約100万人、町人50万、武士50万でした。それが武家地6、町人地2、寺社地2の割合です。必然的に町人は狭い所に住まわざるを得ない、いわゆる長屋住まいです。江戸の火災の三つのポイントは、起きやすい時期が11月～5月、風の向きが北風と西北の風で3分の2を占め、場所で最も多かったのが日本橋の北側といわれていました。江戸時代を通じて2100件を超える記録が出てくることで考えると、江戸はまさに火災都市といえます。当時の消防は、ほとんどが破壊消防で物を壊して延焼を防ぐため、長屋も壊しやすく建てなければなりませんでした。芭蕉39歳の天和2年12月は、八百屋お七の火事によって火が隅田川を越え、芭蕉庵が焼けています。また延宝4年12月にも日本橋界隈が延焼し、被災しています。なお、火災のコースでは三河町(新小田原町)から小田原町の方へだけでなく、三河町に向かって延焼したという逆の風によったものも史料で確認できます。

蕉門の聖地

芭蕉庵があったのは、幕末の「本所深川繪圖」で見ると、松平紀伊守下屋敷近くの隅田川の北角辺りです。経済的庇護者であった魚問屋の杉山杉風(さんぷう)の生け簀がこの深川にありました。延宝8年10月の火災によりその番小屋に住みますが、早く江戸市中に戻りたいと思っていました。しかしそこは同5年の『江戸雀』のときには江戸名勝として記述されている所で、芭蕉はその方向性を変え、一つの偶然性によって一時避難ではなく、定住という形で、その景勝地に腰を下ろすことになります。芭蕉はよく旅の詩人といわれていますが、『野ざらし紀行』も『奥の細道』も深川から旅に出て、深川に戻っています。最終的に元禄7年51歳で旅に出ますが、運悪く同年に大坂で亡くなりました。しかし体調がよければ長崎に行きたかったようです。生きていればまた深川に戻って、文学の創作活動をしたのではないかと思われます。芭蕉が江戸の町という、火災が多い所にいた故に偶然的にも深川に移った、そこがまさに深川の草庵であり蕉門、弟子たちの聖地にもなり得たのだと思います。

レポーターからひとこと

教科書で教わったことと異なる新説に驚きました。内容が新しく変わっていく裏にはこのような地道な調査、研究をなさる方たちがいらっしゃるからなのだと思いました。

参加者112人。

【記録】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・佐藤美代子

第186回　江戸東京博物館友の会セミナー（令和２年１月19日）

公家女性の装束と着装について

講師　田中　潤さん（学習院大学非常勤講師）

そもそも「十二単」とは？

十二単というと平安時代・王朝文化のイメージと思われる人がほとんどだと思います。そして源氏物語絵巻が思い浮かぶと思います。なぜ十二単と呼ばれるようになったのか。単とは、裏地のついていない単もののこと。十二とは、単の上に表裏袷せの衣と呼ばれるものを十二枚重ねたもののことです。

十二単という言葉は源平盛衰記に初めてその記述が見られます。「弥生の末の事なれば、藤がさねの十二単の御衣を召され」とある言葉の意味から広まった俗称と伝えられます。正式名称は五衣唐衣裳と呼ばれます。藤がさねとはかさねの色目のことで、衣服の表地の色がウス紫、裏地が萌葱色のもののことです。この色目が藤の花と新緑という季節感を意匠として取り入れたものを表しています。さまざまな文献の中では、色の解釈が異なっていますが、それは色を文字で伝えるのが難しいからです。

歴史的背景と変遷

平安時代末(12世紀)に現在に伝わる女房装束の原型が整いました。しかし、応仁・文明の乱による京都の荒廃により財源がなくなったため製作の技術、知識が四散し、衰退、混乱期を迎えました。その後禁裏、公家女性の姿を実際に目にしない人々が、口承文学などによりイメージを形成し流布、継承されました。

徳川の時代になり、公家と武家の交流の中で二条城行幸などの儀式が催行され、それに伴い装束の再興がなされました。公武融和の名のもとに、徳川和子の入内の際には女房装束も再興に向かいます。江戸初期の十二単は、現在使われているものとは異なっています。ところが、今に伝わる江戸初期に再興された装束の意匠は、みなさんがおなじみのものに色濃く残っています。それがお雛様です。

江戸後期の復古的な御所の造営や室内空間の再現に伴い、儀式装束も考証、再興に向かいました。学者による研究の積み重ねもあり、それが近代以降につながっていきました。

近代における十二単とその変化

明治以降の十二単の髪型、大垂髪は江戸時代後期から発祥し、十二単の正式な髪型となって現代まで伝統的に継承されています。その理由は王朝文化への復古・再興の意識があったと考えられます。結髪の実態が分からなかったので、当時流行した燈籠鬢を参考にして、その時代における先例の研鑽や当時の文化流行の最前線を選択していました。

近代における女房装束の一番の変化は、近代の国家的儀礼の中に女性が装束・洋服を着て参加するようになったことです。装束の伝統がこうして保存されることになりました。

女房の檜扇の使われ方について江戸時代までは大かざしといい、広げて顔を隠すための用具で、それがたしなみでした。そのため前が見えるように目の部分に穴があいている例もあります。

近代に入り顔を出して儀式に臨席するようになり、現代の宮様は檜扇を広げないでたたんでいます。

五衣・唐衣・裳装束の着装とその構成

十二単は、本当に十二枚着ているのか？　平安時代は華美を競うことから袿の枚数が五枚と定められ、それ以後五衣と呼ばれ、公家女性の正装の一部とされました。近代以降でも、色と文様、袴のひもの長さで身分が分かります。皇后陛下の袴のひもは非常に長いです。十二単は重いので、立って歩いて用いることを主眼として考えられたものではありません。現代の即位の礼で、正殿の回廊を歩くようになったのは、儀式として国内外の多くの人に見せることに意味があるためです。十二単は自分では着られません。

十二単の実際の着装をお見せします。１．下召し・白小袖、精好の長袴を着ける。２．単を着ける。３．五衣を着ける。かさね色目の配色に意味があります(紅梅の匂)。４．打衣を着せる。５．表着を着せる。一番高価な生地。６．唐衣を着せる。腰までの長さしかない、襟が特殊な構造。７．背後から裳を着け、檜扇を持って完成。

みなさんに覚えて帰っていただきたいのは、もし十二単を着るときは手を挙げずに自然に下げてください。挙げると襟元がくずれてしまいます。(この後に田中先生によるモデルに着装の実演がありました)

レポーターからひとこと

我々庶民には縁遠い公家女性の装束について、歴史的背景も絡め非常に分かりやすく説明していただきました。昨年の即位礼正殿の儀の前に話を聞けていれば、皇后様の装束などが一層興味深く見られたと思いました。　　参加者127人。

【記録】文・写真：広報部会・福田　徹

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和元年 11 月 17 日）

春日局と大奥コース

東京メトロ後楽園、都営地下鉄春日の両駅に通じる６番出口で集合しました。明智光秀の腹心斎藤利三の娘お福は、３代将軍家光の乳母となり、後に朝廷から「春日局」の名を賜って大奥で権力を振るったことはよく知られています。今回はそのゆかりの地を訪ねました。

春日出世稲荷神社

白山通りに出て、黄色い歓声が響く遊園地向かいの露地を入ると春日出世稲荷神社があります。春日局となった翌年の寛永７年(1630)、野原だったこの地を拝領して下男30人の宅地とし、鎮守として勧請した神社です。春日局の出世にあやかりたいと「出世稲荷」と呼ばれ、「春日」の地名の起源になりました。白山通りから左に折れて、関東大震災後の復興計画で開通した壱岐坂通りに入ります。この道路によって分断された旧壱岐坂を確認しました。

悲劇を伝える昌清寺

壱岐坂通りを右に折れる急坂を上り、嶺松山弘願院昌清寺へ向かいます。昌清寺は家光の弟忠長ゆかりの寺です。家光よりも将軍に相応しいといわれた忠長でしたが、お福が家康に直訴したことで、家光が３代将軍に決まりました。忠長は駿府城主となりましたが、なお大坂城主を要請したため家光の怒りに触れ、領地は没収、高崎城に幽閉され、寛永10年28歳で自害しました。忠長死後、夫人お昌の方は剃髪し松孝院と号し、菩提を弔うためにこの寺を建立、乳母お清に供養をさせましたが、お清も剃髪してお昌の一字をもらい昌清尼となったことで、寺も昌清寺となりました。ひっそりと立つ墓石は、家光の乳母だったお福とは正反対の一生だったことを思わせます。

▲昌清寺

途中、樹齢600年という大楠を見上げて春日通りに出ます。石川啄木が明治41年(1908)６月から２年２カ月、２階に間借りして家族と共に暮らした理髪店喜之床がありました。店名は変わっても今もここは理髪店です。

本妙寺と坂の町本郷

春日通りを渡って FIRE HOUSE という飲食店の脇道は本妙寺坂です。振袖を焚き上げる供養が原因といわれる「明暦の大火」(明暦３年・1657)の火元といわれる本妙寺がありました。太田道灌江戸城築城のころ、菅公の神霊を京都北野の祠から勧請した櫻木神社と、祈願すれば病が治ると信仰を集めた本郷薬師を参拝しました。江戸払いを思わせる「見送り坂」「見返り坂」、一帯菊畑だったという「菊坂」と、情緒ある名称の坂道を巡りました。

▲櫻木神社

本郷三丁目交差点のビルに「本郷もかねやすまでは江戸の内」という看板があります。享保15年(1730)の大火後、ここから南側が江戸らしい土蔵造りの耐火建築になったことから詠まれた川柳です。「かねやす」は乳香散という歯磨粉を売って繁盛した店だったとか。

天澤山麟祥院

町名が本郷から湯島に変わる辺りに麟祥院があります。門前に春日局像が凛とした姿で立っています。平成元年 NHK 大河ドラマ「春日局」が放映されたのを機に礫川公園に建てられましたが、令和元年10月14日の春日忌の際ここに移されました。

▲麟祥院　春日局墓所

麟祥院は寛永元年、薄幸だった両親を供養するためにお福が創建し、同20年65歳で没するまでの余生をここで過ごしました。からたちで生け垣がめぐらされていたことから、からたち寺とも呼ばれましたが、春日局の法名をとって当初の天澤寺から麟祥院と改名されました。「黄泉の国からこの世を見通せる墓に」という遺言で、墓石は卵型の無縫塔で四方に穴が貫通した立派なものです。墓地の一角の広い範囲が春日局の一族の墓で占められており、彼女の権力の大きさを示しています。

湯島から上野公園へ

菊祭りで参拝者の多い湯島天神で休憩をとり、三菱資料館、講安寺を経て、観光客で賑わう不忍池に到着。春日局が信頼を寄せていた天海僧正建立の辯天堂を見た後、天海の遺髪が収められているという毛髪塔を訪ねました。天海僧正と明智光秀が同一人物という奇想天外な説を聞き、令和２年度の NHK 大河ドラマの主人公が光秀ということもあって、参加者は興味深く聞き入っていました。日が傾いてもなお賑やかな上野公園で約３時間の見学会を終了しました。

参加者73人。

【取材】文：広報部会・大橋弘依
写真：同・田辺友紀子

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和２年１月６日）

日本橋七福神めぐり

世間では仕事始めの月曜日、見学会日和のこの日、東京メトロ水天宮前駅の５番出口付近に集合して、日本橋人形町付近に点在する七福神とその周辺にある史跡を巡りました。

弁財天の水天宮

安産・子授けで有名な水天宮は、平成28年に全面免震構造の建物になり、初詣、安産祈願、お宮参りなどの人で賑わっていました。

▲水天宮

文政元年(1818)、久留米藩有馬家藩主が城下に鎮座していた水天宮を、芝赤羽橋上屋敷内に祀りました。堀越しにお賽銭を投げ入れる人が後を絶たず、時の藩主は毎月５日に屋敷の門を開き庶民のお参りを許したため、「なさけありまの水天宮」という洒落が流行ったそうです。また、当時ある妊婦が水天宮の鈴乃緒のお下がりを頂いて腹帯にして祈願したところ、安産だったことからこのご利益が広まりました。

ここの宝生弁財天は運慶作と伝えられ、本殿に向かって左側に祀られています。能楽のライバル加賀前田家と競った時、有馬家屋敷内にあった社に願掛けして勝利したため、芸能・弁論の霊験あらたかな神様といわれるようになりました。

松島神社から茶ノ木神社へ

水天宮から５分ほどで大門（おおもん）通り沿いの松島神社です。ビルの前に赤い鳥居があり参拝の人が集まっていました。仏教の大黒天と神道の大国主命が習合してできた豊穣の神大国神です。明暦の大火(明暦３年・1657)以前は、歌舞伎役者や葭町（よしちょう）の芸妓など芸能関係者や庶民の参拝で賑わいました。現在は11月の酉の市でその様子をうかがうことができます。

新大橋通りの水天宮前を通り過ぎ、布袋尊の茶ノ木神社へ向かいます。江戸時代、この辺りは３千坪に及ぶ佐倉藩主堀田家中屋敷で、屋敷神として祀られていた稲荷神社です。屋敷内はもとより町方にも火災がなかったため、火伏せの神として信仰を集めました。屋敷の周りに茶の木が生い茂っていたことがこの名の由来です。

小網神社から末廣神社へ

茶ノ木神社からビルの谷間を歩くと、日本橋小学校の立派なビルが目に留まりますが、西郷隆盛の屋敷がこの辺りだったという説明板がありました。小学校裏門を背にして進むと、神楽殿が社殿とくっついた珍しい造りの小網神社があります。福禄寿が祀られた人気の神社で、初詣の人が列を作って順番待ちをしていたため、参拝は断念しました。社殿は昭和４年(1929)、明治神宮造営に携った宮大工により建てられ、戦災を免れてそのまま現存する中央区唯一の木造ヒノキ造りです。1400年代、この社を建立して祈ったら流行り病が鎮まったと伝えられる古社で、中でも社殿に刻まれた昇り龍、降り龍は見事です。

この界隈は江戸歌舞伎、人形浄瑠璃の小屋が集まっており、人形師の家や雛人形を扱う店が立ち並んでいたことが、人形町の名の由来だそうです。あるビルで谷崎潤一郎生誕の地の説明板を一読し、老舗飲食店に列を作る人々を横目に進みます。甘酒横丁交差点に、「蛎殻銀座」の説明板がありました。寛政12年(1800)に貨幣の鋳造を担っていた銀座がこ

▲末廣神社

こ蛎殻町に移ったため、こう呼ばれたそうです。

散策の人で賑わう甘酒横丁通りから再び大門通りに入り、毘沙門天を祀る末廣神社に到着。こぢんまりしていますが、勝負事にご利益ありといわれ、葭原（よしわら）の氏神様として信仰を集めていたそうです。ちょうど獅子舞が来ていて、下町風情ある街並みと相まって昭和のお正月風景を思い出させます。

笠間稲荷神社と椙森神社

浜町緑道に立つ「勧進帳」の弁慶像を見て、さらに浜町公園、明治座を右手に通り過ぎ寿老神の笠間稲荷神社に向かいます。安政６年(1859)、笠間藩主牧野貞直が常陸笠間神社の御分霊を江戸下屋敷内に合祀奉斎したのが始まりで、以後、商人庶民を問わず信仰を集めました。

この界隈には、浜町、堀留町、小舟町など昔ながらの粋な町名が多く、それぞれが堀や川に関わりがあるという由緒を聞きながら、いよいよ七つ目は恵比須神の椙森（すぎのもり）神社に向かいます。平将門の討伐祈願や太田道

▲椙森神社

灌の雨乞い祈願などの記録が残る古社で、江戸時代の富興行を記念する富塚もあります。七福神を回り終わって、新しい日本橋の顔、コレドなどの商業施設を経て日本橋に到着し、「日本橋魚市場発祥の地」記念碑や「東京市道路元標」などの説明を聞き、約３時間の見学会を終了しました。　　参加者106人。

【取材】文：広報部会・大橋弘依
写真：同・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

えど東京一景

(21) ー田園調布駅旧駅舎ー

東急東横線・目黒線の田園調布駅で下車、地下ホームから地上改札口を出ると、左手の階段上に赤屋根の旧駅舎が立っています。矢部金太郎の設計で大正12年(1923)に完成、駅の地下化に伴い平成２年に解体されましたが、住民の強い要望により平成12年に元の場所に復元されました。マンサード・ルーフという古典的建築様式を取り入れたドイツの民家風のしゃれた建物で、「関東の駅百選」に選ばれています。旧駅舎正面は花壇のあるロータリーになっており、そこから放射状の住宅地が西側に広がっています。駅へ向かう街路は全て下り坂で、スリバチの底が駅舎という感じです。また、東側の低地は商店街で趣がガラッと変わります。

この地域は、大正７年に実業家の渋沢栄一らによって設立された田園都市株式会社により開発が行われました。それに併せて鉄道建設が進められ、同12年に子会社目黒蒲田電鉄(現東急電鉄)の目黒駅～丸子駅(現沼部駅)開通時に駅が開業しました。当初は調布駅でしたが、同15年に田園調布駅と改称しています。昭和７年(1932)には荏原郡東調布町の一部が大森区田園調布となり、名実ともに田園調布が地名となりました。

以来、駅舎は田園調布のシンボルとして、長年にわたり多くの人々に親しまれてきました。私も近隣に引っ越してからは日常的に利用するようになっており、取り壊しが決まった時は寂しい思いがしたものです。幸い復元されてからは四季折々の景色を楽しんでいます。特に春の桜と秋のイチョウ並木の時期がおすすめです。

【取材】文：広報部会・菊池真一／イラスト：同・福島信一

江戸博クリップ

美術館と博物館

都市歴史研究室　室長　岡塚 章子（おかつか あきこ）

江戸博に異動してきて、はや11年が経とうとしています。こちらに来る前は、写真美術館に13年、庭園美術館に５年おり、博物館勤務は江戸博が初めてでした。前回の「江戸博クリップ」では、江戸博の建物が大きすぎて自分がどこにいるか分からない、といったようなことを書かせていただいた記憶があります。美術館と博物館、同じようで異なります。まず収蔵品の呼び方ですが、基本的に美術館は「作品」、博物館は「資料」です。よって作り手については、美術館は「作家」、博物館は「制作者」や「作者」。そして美術館の場合、作品名は作家によるものですが、博物館の民俗資料などは館の方で資料名を考えてつけることも多々あります。作品の「点数」については「員数」、「寸法」については「法量」を用います。

この他「作品を取り扱う時に白手袋をはめるのか否か」など、時として判断に迷うこともあります。特に他館に資料を借用に行った際、作品を素手で扱うつもりでいたところ、先方の学芸員が白手袋をはめたのを見て、慌てて白手袋を出して手にはめ、コンディションチェックをしたこともありました。

展覧会会場を比べてみても美術館では作品の鑑賞が主であるため解説はあまり多くなく、博物館の場合は資料を理解するために丁寧な解説がついていて、資料よりも解説のほうが目立っているような展示もあります。また縦書きの解説パネルも博物館ならではのもので、美術館でお目にかかることは滅多にありません。

この他にも美術館と博物館の違いはいろいろとあると思います。展示方法や図録など、見比べて楽しんでみてはいかがでしょうか。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸 名所図会を歩く…㊽

［大堂から十羅刹女の宮］

松月院の高島秋帆先生紀功碑

今回は板橋区の赤塚周辺を歩きます。赤塚城を中心とする千葉氏ゆかりの史跡が点在する地域です。歩いたのは立冬を迎えた11月上旬と紅葉が見頃の12月上旬でした。

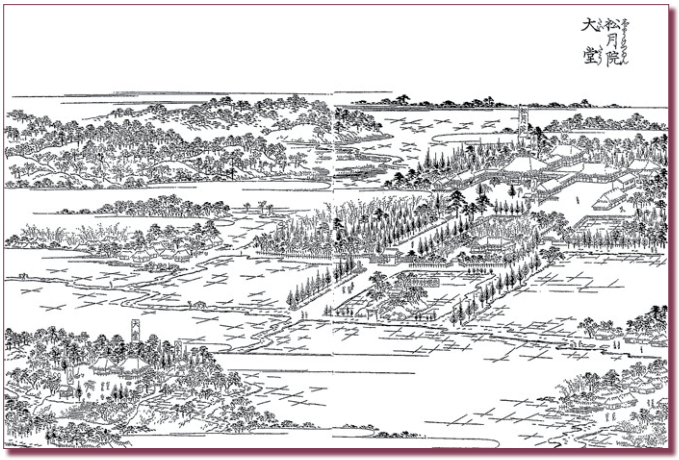
大堂から萬吉山松月院

東武東上線下赤塚駅下車。赤塚中央通りを北へ約1km歩いて、左手の脇道を入ったところに大堂(現松月院大堂)があります。古墳上に建てられた阿弥陀堂で、区内最古の寺といわれています。南北朝時代には七堂伽藍を備えた大寺院でしたが、現在では延宝年間(1673〜81)に再建された阿弥陀堂と鐘楼がひっそりと立つばかりです。本尊の阿弥陀如来は松月院に収蔵されています。また暦応3年(1340)鋳造の梵鐘は板橋区立郷土資料館の所蔵となっており、現在鐘楼に架かっているのは複製です。右隣にある赤塚八幡神社は大堂の守護神として創建されたといわれています。

大堂北側の松月院通りを渡ると、萬吉山松月院の参道入り口があります。右手交番の隣には三遊亭円朝作の「怪談乳房榎」のモデルとなった榎の4代目が移植されており、記念碑が立てられています。山門をくぐると天然記念物のヒイラギがあり、中門の先には宝暦4年(1754)建立の本堂が堂々たる姿を見せています。元は宝持寺でしたが、赤塚城主となった千葉自胤が延徳4年(1492)に千葉一族の菩提寺として松月院と改めました。墓地には千葉一族の墓と伝わる墓所があります。また、幕末の兵学者高島秋帆が天保12年(1841)に徳丸ケ原で西洋式砲術訓練を行った際にここを本陣としたことから、台座の上に銅製の大砲が直立するという珍しい形の「高島秋帆先生紀功碑」が境内に立てられています。最初に訪れた日には松宝閣(宝物館)の特別公開が行われており、徳川将軍朱印状・大堂阿弥陀如来坐像・大堂閻魔王坐像・徳丸ケ原調練図などの展示を見ることができました。

狐雲山乗蓮寺から千葉家古城の址

松月院脇の東京大仏通りの坂を下っていくと、左手の道を入った先に狐雲山(現赤塚山)乗蓮寺があります。元は中山道板橋宿の仲宿にありましたが、昭和46年(1971)から53年にかけて当地へ移転しています。石段を上って山門をくぐると、右側に通り名にもなっている「東京大仏」があります。同52年建立の青銅仏で、座高8.2m・蓮台2.3mと日本で3番目の大きさです。左手にある8体の「旧藤堂家染井屋敷石造物」は津藩藤堂家下屋敷の庭園に配されていた石像で、中でも「がまんの鬼」と名付けられた天邪鬼のユーモラスな姿が目を引きました。また境内には「天保飢饉の供養塔」、中世板橋氏に由来する「板橋信濃守忠康墓」、「説教浄瑠璃五代目若太夫墓」などがあります。



▲長谷川雪旦：松月院　大堂

さらに通りを進むと、右手に赤塚不動の滝があります。江戸時代には富士山や大山への参詣に際しての水垢離場でした。滝上に祀られている2体の不動明王像は千葉氏が安置した物だといわれています。ただし現在ではちょろちょろと水が流れ落ちるのみで、滝とは名ばかりになっています。

その先の交差点を左に入ると、赤塚公園城址地区へ上がる細い急坂があり、園内を進むと赤塚城本丸跡の広場に出ます。ここが千葉家古城の址の一部で、乗蓮寺のある場所は二ノ丸に当たります。広場を横切って反対側の道を下ると大きな高低差があり、本丸がかなり高台にあったことが分かります。下に見えてくる溜池は空堀跡に造られたものです。池の隣にある郷土資料館で赤塚城関連の資料を見たいと思っていたのですが、何とリニューアルのため休館中！　残念ながら大堂の梵鐘も見られませんでした。

十羅刹女の宮

表通りを戻って先ほどの交差点を左折して進むと、左手に十羅刹女の宮(現赤塚諏訪神社)があります。千葉自胤が長禄年間(1457〜60)に信濃の諏訪神社を勧請したと伝えられ、寛永7年(1630)に十羅刹女を合祀しました。鳥居をくぐるとすぐ左側に「諏訪神社田遊び」の石碑があります。田遊びは水田耕作に関わる神事で、五穀豊穣と子孫繁栄を祈願する祭りです。現在でも赤塚諏訪神社では毎年2月13日に行われており、徳丸北野神社の田遊びとともに国の重要無形民俗文化財になっています。参道を進むと両脇には天然記念物の夫婦イチョウが立っており、黄金色の大鳥居のようでした。

神社前の通りから赤塚公園の中を東へしばらく歩いて、松月院通りと交わる所を北へ向かうと、都営三田線高島平駅を通り越した先に徳丸ケ原公園があります。園内には高島秋帆の砲術訓練に因んだ「徳丸原遺跡碑」が立てられています。元は秋帆が指揮を執った弁天塚(新高島平駅付近)にありましたが、区画整理によりここへ移されました。江戸時代にはこの一帯の原野が徳丸ケ原と呼ばれていましたが、昭和44年の町名変更の際、秋帆に因んでその一部が高島平と名付けられています。かつての広大な景色に思いをはせつつ帰路に就きました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

古文書講座

◆ 2019 年度第３期の残日程

- 入門編 3/4(水)、初級編 3/18(水)、中級編 3/21(土)

新年度の講座概要、第１期の日程、申込方法などについては３ページをご覧ください。

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展「奇才ー江戸絵画の冒険者たちー」

◆4月25日(土) ～6月21日(日)の間、特別展「奇才ー江戸絵画の冒険者たちー」が開催されます。江戸絵画史では、従来の通史の枠に収まらない自由で斬新な発想に富んだ画家たちの作品が見直されています。また、通史の中に位置付けられる人たちの中にも既成の枠を打ち破った画家として注目を集める人がいます。本展では、こうした斬新な表現に挑んだ画家たち、諸国を代表する“奇才”の画家の作品が一堂に会し、三都および諸国から江戸時代の個性的な絵師の作品が結集して、従来の江戸絵画史の概念を見直します。

本展企画担当の江里口友子学芸員から「見どころ解説」を聞き、会員だけの観覧会をゆっくりと心ゆくまでお楽しみください。

- 開催日：５月１日(金)
- 受付開始：16時30分
  17時～17時30分　見どころ解説　１階会議室
  17時30分～19時　自由観覧　１階特別展示室
- 申込締切：４月16日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館　１階会議室／１階特別展示室
- 定員：120人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】中山和巳(事業部会)

友の会セミナー

第 189 回「江戸時代の朝廷と幕府 ー皇位継承を中心にー」

講師　長坂良宏さん(日本近世史研究者)

◆昨年2019年は、天皇陛下の御退位(御譲位)と皇太子殿下の御即位が行われました。この譲位は、文化14年(1817)、当時の光格天皇が譲位して以来およそ200年ぶりのことでした。この退位(譲位)により、にわかに光格天皇、ひいては江戸時代の天皇に注目が集まりました。本セミナーでは、江戸時代の天皇や朝廷とはどのような存在だったか、幕府との関係などを紹介し、中でも特に、江戸時代の皇位継承について、取り上げていただきます。

◆講師略歴：ながさか・よしひろ

昭和55年(1980)群馬県生まれ。近年まで群馬県在住。学習院大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程修了。博士(史学)。専攻は日本近世史、近世政治史、朝幕関係史。千葉市立郷土博物館非常勤職員、慶應義塾高等学校非常勤講師等を経て、現在、独立行政法人国立公文書館勤務。単著に『近世の摂家と朝幕関係』など、編著者として、『京都御所造営録-造内裏御指図御用記』などがある。

- 開催日時：３月22日(日)　14時～15時30分
- 申込締切：３月12日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

第 190 回［江戸時代人の動物観ー「不思議な存在」狸は化ける　狐はどうする?］

講師　石田　戢さん(動物観研究所所長)

◆明治の文明開化以後、社会は大きな変化を遂げたが、動物観についても同様のことがいえる。江戸時代、動物は理論、学問の対象として考えられたことはほとんどないが、昔話の主人公となって道徳的素材として大いに用いられた。また妖怪的であったり、憐みの対象であったり、動物食文化などで、現在とは様々な特徴的な違いがある。今回はその中から、狐と狸、昆虫、そして生類憐みの令を取り上げ、欧米や現在との比較を通じて、江戸時代の動物観の一端を考えてみる。

◆講師略歴：いしだ・おさむ

1946年東京生まれ。1971年東京大学文学部卒、同年上野動物園勤務、井の頭自然文化園、葛西臨海水族園勤務などを経て多摩動物公園副園長、2007年帝京科学大学教授、2014年千葉市動物公園園長、2019年退職後、動物観研究所所長。その間、ヒトと動物関係学会会長、ボルネオ保全トラストジャパン理事長など。

- 開催日時：４月25日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：４月13日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

見学会

『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町(8)

◆神田川下流に架かる浅草橋(浅草御門跡)から、かつての日光街道(現江戸通り)を北へ駒形堂まで、「第六天篠塚稲荷」「西福寺」「新堀端」「大倉前閻魔堂牛頭天王十王堂」「御厩河岸渡」「正覚寺八幡宮」「三島明神社諏訪明神社」「駒形堂」と記された挿絵に描かれた場所を訪ねます。全国の天領からの年貢米を収納していた浅草御蔵や、その扶持米を換金する業者の札差でよく知られた所、距離は４km ほどで所要時間は約２時間半。解散は駒形堂前広場(都営浅草線浅草駅横)となります

- 開催日：４月19日(日)小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：12時15分　受付終了：12時45分(時間厳守)

- 集合場所：JR 中央・総武線各駅停車「浅草橋」駅東口
  （受付場所の浅草橋御門跡までは係が案内）
- 申込締切：４月６日（月）必着
- 定員：150人　同伴者可（保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記）
- 参加費：会員、同伴者とも500円（当日払い）

【企画担当責任者】下永博道（事業部会）

第11回「えど友会員発表会」の発表者を募集します

◆名称を改めて２回目となる「えど友会員発表会」発表者募集のお知らせです。この会は、日頃の友の会活動の中で培われた様々な成果の発表を通じて、会員の意識向上と相互理解を深めることを目的としています。

◆「発表」は従来の研究成果をはじめとして、豊かな経験に基づく昔語り、サークルで学んだ技等々「江戸東京の歴史と文化に関するもの」であればジャンルを問いません。

◆「あなたが主役」の会員発表会です。多数の応募をお待ちしています。

【発表会概要】

・開催日時：８月14日（金）　13時30分～16時30分

・会場：江戸東京博物館・１階会議室

【応募要項】

・発表者は友の会会員に限るものとし、講演料などのお支払いは致しません。

・発表希望者は、はがきまたは電話で、「発表会応募：氏名、会員番号、電話番号、発表内容」を事務局までお送りください。折り返し「えど友会員発表会申込書」をお送りします。必要事項をご記入の上ご返送ください。申込書の提出をもって正式の応募と致します。

・応募締め切りは、５月７日（木）です。なお応募者多数の場合は調整させていただきますが、その結果につきましては５月下旬に応募者にご連絡します。

【企画担当責任者】川上由美子（事業部会）

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●特別展「江戸ものづくり列伝ーニッポンの美は職人の技と心に宿るー」

会　期：２月８日（土）～４月５日（日）
会　員：一般550円、65歳以上275円、大・専門生440円
同伴者：一般880円、65歳以上440円、大・専門生700円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●（注）割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●特別展「奇才ー江戸絵画の冒険者たちー」

会　期：４月25日（土）～６月21日（日）
会　員：一般700円、65歳以上350円、大・専門生560円
同伴者：一般1,120円、65歳以上560円、大・専門生890円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●（注）割引を受けられる同伴者は１人だけです。

企画展のご案内

●市民からのおくりもの2019

会　期：３月10日（火）～５月10日（日）
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

３月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

４月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

見学会「バスで巡る品川宿・日本橋・千住宿」の延期について

ご存知のように新型コロナウイルスの感染はその終息が見えない状況です。これを受けて３月15日（日）催行予定の上記バス見学会は、今秋以降へ延期することを決定しました。なお参加者の募集は、改めて行う予定です。

【企画担当責任者】待場浩・川上由美子（事業部会）

催事のお申込方法

◆**普通はがき（63円）**に、
①催事名（略名可）・開催日
②会員番号**（必須）**
③氏名（同伴者連記）
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**
＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日（10時～12時、13時～17時）**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてから ご参加下さい。

会報＜えど友＞第114号
令和２年３月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：林　正信（会長）　編集長：中村貞子
岡本 脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、横島利明、福田 徹、元沢 宏
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910